

発話スタイルがパーソナリティ認知に及ぼす効果 (2)^{1), 2)}

— 叙述的発話と断片的発話の比較 —

小川 一美³⁾ 吉田 俊和

問題

対人的なコミュニケーションを行う際に、人は、相手がどのような人物であるかを推測しようとする。これは対人認知やパーソナリティ認知と呼ばれるものである。このパーソナリティ認知を引き起こす要因として考えられるのは、相手の容貌などの外見やその相手との会話などである。容貌とパーソナリティ認知の関係を検討した研究(大橋・三輪・平林・長戸, 1973)や身体的特徴と対人魅力の研究(大坊, 1986)などはいくつか見られるものの、会話とパーソナリティ認知の関係についてはほとんど明らかにされていない。一言で会話といっても非常に多くの特徴が存在するが、その一つに発話スタイルと呼ばれるものがある。岡本(1985)は、発話スタイルを含めた言語的スタイルが説得に及ぼす効果を概観し、整理・検討した。岡本(1985)にも示されているとおり、発話スタイルについては、説得的コミュニケーション研究において、いくつかの検討がなされてきた(Jones & Davis, 1965; Lind, Erickson, Conley & O'Barr, 1978; Lind & O'Barr, 1979; Miller & Lobe, 1967)。しかし、発話スタイルは、説得場面に特有なものではなく、日常のコミュニケーションにおいても我々が頻繁に用いているスタイルである。小川・吉田(1998)は、発話スタイルの一つである、Rokeach(1960)が概念化した決めつけ型発話に着目し、パーソナリティ認知との関係を検討した。ここでは、消費的会話場面と課題解決的会話場面といった日常的会話場面を設定し、決めつけ型発話と非決めつけ型発話の比較から、いずれの場面で

も決めつけ型発話は「力本性」が高く、「個人的親しみやすさ」および「社会的望ましさ」は低く評定されることが示された。この結果からも、発話スタイルが、説得場面のみならず日常的な対人コミュニケーションにおいても、パーソナリティ認知に影響を与えることが明らかとなった。

発話スタイルの一つに叙述的(narrative)発話と断片的(fragmented)発話と呼ばれるものがある。このスタイルに関して、検察官や弁護人の質問に対する証人の応答に、自発的に長く持続する叙述証言(narrative testimony)と、相手からの質問に依存して、短くこま切れな断片証言(fragmented testimony)の2種類が存在することが指摘された(Lind et al, 1978; Lind & O'Barr, 1979)。すなわち、日常的な会話場面に置き換えると、叙述的発話とは質問に対して自発的に長く述べる発話であり、断片的発話とは質問に対して依存的にかつ短く述べる発話のことである。そこで、本研究では、この発話スタイルがより多く現れる状況、つまり質疑応答が自然に行われる状況である面接場面を設定し、叙述的発話と断片的発話がパーソナリティ認知に及ぼす効果について検討する。

Kleinke, Staneski & Berger(1975)は、女子学生の面接者に対する印象評定を、男子学生に行ったところ、発言量の多少により、印象評定が異なることを見出した。具体的には、発言量の多い面接者は、発言量の少ない面接者よりも、暖かい、親切、友好的と評価され好まれるという結果であった。林(1978a)は、人が他者のパーソナリティを判断する場合には、比較的安定した3つの次元を働かしていることを指摘している。3つの次元が働くことを支持している研究は他にもいくつかある(林, 1978b; 中里, 1977; 大橋他, 1973; 大橋・平林・長戸・吉田・佐伯, 1975)。林(1978a)は、この3次元を「力本性」「個人的親しみやすさ」「社会的望ましさ」と名付けた。Kleinke et al(1975)の結果を、林(1978a)のパーソナリティ認知の基本3次元に照らし合わせると、「個人的親しみやすさ」の次元に対して、発言量

- 1) 本研究の一部は、The Third Conference of the Asian Association of Social Psychologyにおいて発表された。
- 2) 本研究の実施にあたって、名古屋大学平成10年度卒業生熊澤佐知子氏の協力を得ました。記して感謝いたします。
- 3) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程(後期課程)

が影響を及ぼしたと解釈できる。つまり、発言量の多い面接者は発言量の少ない面接者より、個人的に親しみやすいと認知されたと言える。本研究で取りあげる叙述的発話と断片的発話では、叙述的発話は1回の発言量が多く、断片的発話は少ない。したがって、叙述的発話を用いる話者の方が断片的発話を用いる話者よりも、個人的に親しみやすいと認知されることが予測できる。また、発言時間が長い叙述的発話は、積極的な印象を与えやすく、一方の断片的発話は消極的な印象を与える可能性が考えられる。そのため、積極性や活動性から成る「力本性」は、叙述的発話を用いる話者の方が断片的発話を用いる話者より高く認知されることが予測される。Pearce & Conklin (1971) は、淡々とした伝達スタイルの送り手の方がダイナミックな伝達スタイルの送り手よりも、より信頼され、好意的に評価されることを見出し出している。細切れで断片的な応答をする断片的発話は、淡々とした話し方であるとみなすこともでき、断片的発話を用いる話者の方が叙述的発話を用いる話者より、信頼され、好意的に評価されると考えられる。したがって、信頼性、誠実性などから成る「社会的望ましさ」次元では、断片的発話を用いる話者の方が叙述的発話を用いる話者より高く認知されることが予測できる。

ところで、Lind et alの研究 (1978, 1979) やその他の研究 (廣兼・吉田, 1984; 今川・中村, 1994; 大坪・吉田, 1990) において、話者の性別による印象形成への影響が指摘されている。そこで、本研究においても、性別による効果についての検討を加える。日本では、女性はおしゃべりでも愛嬌があるなどとポジティブな評価を得ることが多いが、男性は無口な方が良いとされる傾向がある。したがって、女性は叙述的発話を用いる方がポジティブに、男性は断片的発話を用いる方がポジティブにみなされるのではないだろうか。

以上のことより、本研究では以下のような仮説を設定した。

- 仮説1. 叙述的発話を用いる話者の方が断片的発話を用いる話者より、「個人的親しみやすさ」「力本性」の得点は高く、「社会的望ましさ」の得点は低くなるであろう。
- 仮説2. 女性の話者については、断片的発話を用いるより叙述的発話を用いる方が3因子全てにおいて得点が高くなり、男性の話者については、叙述的発話を用いるより断片的発話を用いる方が得点が高くなるであろう。

また、叙述的発話や断片的発話というのは、意図的に使い分けることが可能である。したがって、これらの発話とパーソナリティ認知の関係を検討することで、面接

場面における適切な発話の特徴を見出し、現実の面接場面で適用可能となるような提言を行いたい。

実験1

目的

面接場面を設定し、叙述的発話と断片的発話を用いる話者それぞれに対するパーソナリティ認知の違いを検討する。

方法

被験者 女子大学生20名。被面接者(実験協力者)の発話スタイルと性別が、叙述的発話×男性、叙述的発話×女性、断片的発話×男性、断片的発話×女性の4群を設定し、各群に5名ずつの被験者をランダムに振り分けた。**実験協力者** 声の質や話し方に特徴がないと思われる男女1名ずつの大学生。被験者に実験協力者であることが気づかれず、自然な会話を行えるよう、実験協力者は2種類のシナリオの被面接者役を約2週間練習した。

被面接者(実験協力者)用シナリオおよび面接者(被験者)用質問カード 叙述的発話と断片的発話は質疑-応答形式の会話で頻繁に見受けられるものである。そのような会話が自然に成立する代表的な場面は面接場面である。また、被験者が大学生であることを考慮し、コンビニエンスストアのアルバイト採用面接場面を設定した。会話は、面接者であるコンビニエンスストアの店長(被験者)とアルバイト志願者(実験協力者)の二人で構成された。面接者役である被験者は、あらかじめ作成された質問カードを用いて被面接者(実験協力者)に質問し、被面接者(実験協力者)はあらかじめ作成されたシナリオに沿ってその質問に答えた。作成された被面接者(実験協力者)用のシナリオは、叙述的発話バージョンと断片的発話バージョンの2種類であった。2種類のシナリオの内容は同じになるよう考慮したが、情報の出現順序は、より自然な会話に近づけるため前後する箇所もあった。このシナリオは被面接者(実験協力者)のみが使用し、面接者(被験者)には被面接者がシナリオに則して答えていることは知らせなかった。シナリオ例はTable 1に示した。また、作成された面接者(被験者)用質問カードには、被面接者用シナリオにおける面接者のセリフのみを取り出し、質問内容と質問例を記載した。質問カード例はTable 2に示した。

質問紙 パーソナリティ評定尺度:大橋他(1973)によって作成されたパーソナリティ評定尺度(20項目)を用い、被面接者(実験協力者)のパーソナリティ評定を9段階で求めた。林・大橋・廣岡(1983)の因子分析結果を参考に、「力本性」5項目、「個人的親しみやすさ」10項目、

「社会的望ましさ」5項目に振り分け、各下位尺度の合計点を算出した。

手続き ついたての置かれた机の奥に、あらかじめ実験協力者が座っており、被験者は実験協力者の顔を見ないで着席した。被験者には、音声を手がかりとした第一印象について研究をしており、本研究では人が抱く初対面の人に対する印象について調査することを目的としていと伝えた。そして、ついたてを介して会話を行うことの了承を得た。「初対面の相手についてある程度の情報を得ていただくため、あなたには面接者として質問をする側になってもらいます。場面はアルバイトの採用面接場面を設定していますので、あなたは店長役を演じて下

さい。」と教示した。また、相手にはアルバイトの志願者役を依頼してであると伝えた。そして、質問カードを被験者に提示し、カードに示された項目全てを順番に質問し、情報を得たらチェックするよう依頼した。その際、相手には、正直にありのままの自分について述べるよう伝えてあるので、相手が質問カードに書かれている先の質問について答えてしまうなどカードと合わないこともあり得るが、相手が既に答えていると思われることについては質問せず、次の質問へと移るように注意した。面接終了後、質問紙への回答を求めた。最後に、被験者に実験の正確な目的を説明し、実験を終了した。所要時間は、いずれの群でも15～20分であった。

Table 1 被面接者（実験協力者）用シナリオ例

<叙述的発話バージョン>		<断片的発話バージョン>	
面接者	学生さんですか？	面接者	学生さんですか？
被面接者	はい。名古屋大学教育学部の3年生で、教育心理学を専攻しています。	被面接者	はい。
		面接者	どこの大学ですか？
		被面接者	名古屋大学です。
		面接者	何年生ですか？
		被面接者	3年生です。
		面接者	何学部ですか？
		被面接者	教育学部です。
		面接者	何を専攻しているのですか？
		被面接者	教育心理学です。

Table 2 実験1 質問カード例

(質問内容)	(質問例)
1. 学生かどうか	・学生さんですか？
2. 大学名	・どこの大学ですか？
3. 学年	・何年生ですか？
4. 学部	・何学部ですか？
5. 専攻	・何を専攻しているのですか？

Table 3 実験1 条件ごとの各下位尺度得点の平均値と標準偏差

	力 本 性	親しみやすさ	社会的望ましさ
(実験協力者：男性)			
叙述的発話	7.36 (0.68)	6.72 (1.17)	6.04 (0.86)
断片的発話	6.80 (0.37)	6.96 (0.65)	6.68 (0.59)
(実験協力者：女性)			
叙述的発話	7.48 (0.48)	5.06 (0.92)	6.84 (0.54)
断片的発話	6.12 (1.27)	5.22 (1.06)	6.52 (0.70)

Note: () = SD

実験計画 発話スタイル(叙式的発話/断片的発話)×実験協力者の性別(男性/女性)の2×2の要因計画であった。

結果

「力本性」「個人的親しみやすさ」「社会的望ましさ」のそれぞれについて、被面接者が用いる発話スタイルおよびそのスタイルを用いる被面接者の性別の効果を検討するため、発話スタイル(2)×性別(2)の2要因分散分析を行った。条件ごとの、下位尺度合計得点を項目数で割った値の平均値および標準偏差をTable 3に示した。分析の結果、「力本性」次元において、発話スタイルの主効果が確認された($F(1,19)=7.52, p<.05$)。つまり、叙式的発話の方が断片的発話よりも力本性得点が高く評定されることが示された。また、「個人的親しみやすさ」次元においては、性別の主効果が確認された($F(1,19)=15.27, p<.01$)。つまり、発話スタイルを用いる被面接者(実験協力者)が女性よりも男性の場合に、個人的親しみやすさが高く評定された。「社会的望ましさ」次元ではいずれの効果も確認されず、発話スタイルと性別の交互作用も見られなかった。

考察

本研究の仮説1は、叙式的発話を用いる話者の方が断片的発話を用いる話者より、「個人的親しみやすさ」「力本性」の得点は高く、「社会的望ましさ」の得点は低くなるというものであった。分析の結果、発話スタイルの効果が見られたのは、「力本性」の次元のみであった。叙式的発話を用いた話者の方が断片的発話を用いた話者よりも「力本性」が高く評価されたわけだが、叙式的発話は、自発的で発言時間も長いので、「意欲的な」「自信のある」「積極的な」といった項目から構成されている「力本性」が高く評価されたと考えられる。したがって、「個人的親しみやすさ」および「社会的望ましさ」次元の発話スタイルによる効果は確認されなかったが、仮説1は部分的に支持された。また、発話スタイルと性別の交互作用は確認されなかったことから、仮説2は支持されなかった。しかし、性別の主効果が「個人的親しみやすさ」次元で確認された。この結果から、実験協力者の個人的な音声特徴が印象評定に影響を及ぼした可能性が考えられる。本実験では、実験協力者は男女一人ずつであったため、個人的な音声特徴による影響なのか性別の効果によるものかを断定することは不可能である。この点については、実験計画を修正し、検討する必要がある。

ところで、本実験では、実験手続き上の問題から、被験者に実験状況の不自然さを感じさせてしまったことが、

被験者による自由記述から明らかになった。第一の原因は、叙式的発話状況、断片的発話状況の両方において、同一の質問カードを使用したことにあると考えられる。断片的発話状況の被験者はそれほど違和感を感じていなかったが、叙式的発話状況では、面接者である被験者がこれから質問しようとしている内容について被面接者が次々に答えてしまうため、被面接者があらかじめ質問内容を知っている実験協力者ではないか感じたようである。第二に、被面接者である実験協力者が、被験者よりも先に入室しており、被験者が入室する前に実験の説明を終えているという設定が、不信感を抱かせてしまったようである。以上のことより、実験2では、実験1の問題点を改善し、よりよい実験計画のもと、叙式的発話と断片的発話という発話スタイルがパーソナリティ認知に及ぼす効果について再検討する。

実験2 予備調査

目的

実験1より、実験協力者の個人的な音声特徴がパーソナリティ認知に影響を与える可能性が指摘された。そこで、声または話し方に特徴がないかを考慮し、実験2で刺激人物となる実験協力者男女各2名を選定した。しかし、その選定はあくまでも主観的な判断であったため、予備調査では、彼らの音声特徴がパーソナリティ認知に影響を与えていないかを確認する。

方法

被験者 愛知県内の女子短大生54名

質問紙 大橋他(1973)によって作成されたパーソナリティ評定尺度(20項目)について、7段階で回答を求めた。

手続き 実験協力者である男女各2名に、事典から引用された説明文(約1分30秒)を朗読させ、それをテープに録音した。被験者は2教室に別れていたため、男性と女性一人ずつによる2種類の刺激テープを1セットとし、各教室で流し、それぞれの人物に対するパーソナリティを被験者に評定させた。

結果と考察

パーソナリティ評定尺度全20項目の総合得点について、性別ごとに2名の差の検定を行った。その結果、女性の実験協力者間では有意差が見られなかった($t(52)=1.64, n.s.$)。したがって、この2名の女性実験協力者にはパーソナリティ評定に影響を与えるような声や話し方の特徴の違いは見られないと判断した。一方、男性の

実験協力者間では、得点間で有意さが確認された ($t(52)=2.59, p<.05$)。すなわち、この2名の男性実験協力者には、パーソナリティ評定に影響を与える何らかの音声的な特徴の違いがあったと考えられる。したがって、個人的な音声特徴がパーソナリティ認知に及ぼす影響の存在は認めざるを得ない。しかし、個人の音声特徴を排除して実験を行うことは非常に困難なことであるため、本実験では、この4名の実験協力者によって実験を行った。

本実験

目的

実験1では、「個人的親しみやすさ」次元において性別の効果が示された。しかし、その効果は性差によるものではなく、実験協力者個人の音声的特徴の影響である可能性も考えられた。そこで、予備調査を行い、本実験の実験協力者男女各2名について、パーソナリティ認知に及ぼす個人の音声特徴が見られるかを確認した。その結果、二人の男性の間で印象得点に有意な差が見られた。このことから、個人的な音声特徴がパーソナリティ認知に何らかの影響を与えることは認めざるを得ない。しかし、個人的な音声特徴を全て統制することは非常に困難であるため、本実験では、この結果を念頭においた上で、この実験協力者4名によって実験を行う。

そして、実験状況の不自然さについてであるが、実験1では、叙述的発話状況において、被験者がこれから質問しようとしていることについて先に被面接者(実験協力者)が答えてしまうことから不信感が生じていた。この点については、質問カードを叙述的発話状況用と断片的発話状況用の2種類用意することで解決できると思われる。つまり、断片的発話状況では実験1と同様のカードを使用し、叙述的発話状況では、実験1のカードの一部から成る新たなカードを作成し使用する(Table 4)。また、実験についての説明を実験協力者と被験者に対して同時に行うなど、被験者に被面接者が実験協力者であることを気づかせないよう手続きを工夫する。

また、実験1では被験者が全て女性であったため、同性・異性という性別の組み合わせの効果については検討できなかった。そこで、本実験では、男性被験者にも同様の実験を実施し、発話スタイルと性別の関係についてより詳細に検討する。

方法

被験者 男子大学生40名、女子大学生40名の計80名。

実験協力者 予備調査で選定された男女各2名の大学生。

実験1同様、被面接者役を、約2週間練習した。

被面接者(実験協力者)用シナリオおよび面接者(被験者)用質問カード 実験1における会話シナリオの一部を改良し作成した。作成したシナリオは、叙述的発話バージョンと断片的発話バージョンの2種類であった。質問カードは、実験1の問題点を改善するため、断片的発話状況では実験1と同様のカードを使用し、叙述的発話状況では、実験1のカードの一部から成る新たなカードを作成した(Table 4)。

質問紙 実験1と同様のパーソナリティ評定尺度を用いて、被面接者(実験協力者)のパーソナリティ評定を7段階で求めた。

手続き 実験1とほぼ同様であるため、異なる点のみを記す。面接者である被験者に質問カードを提示し、全ての項目について順番に質問するよう教示した。一方、実験協力者にも面接者の質問に自分のこととして答えるよう教示した。所要時間は、いずれも15分前後であった。

実験計画 発話スタイル(叙述的発話/断片的発話)×実験協力者の性別(男性/女性)×被験者の性別(男性/女性)の2×2×2の要因計画であった。

結果と考察

パーソナリティ評定尺度の下位尺度である「力本性」「個人的親しみやすさ」「社会的望ましさ」のそれぞれについて、発話スタイル(2)×実験協力者の性別(2)×被験者の性別(2)の3要因分散分析を行った。条件ごとの、下位尺度合計得点を項目数で割った値の平均値および標

Table 4 実験2 質問カード例

<叙述的発話状況用> (質問内容)		<断片的発話状況用> (質問内容)	
	(質問例)		(質問例)
1. 学生かどうか	・学生さんですか？	1. 学生かどうか	・学生さんですか？
		2. 大学名	・どこの大学ですか？
		3. 学年	・何年生ですか？
		4. 学部	・何学部ですか？
		5. 専攻	・何を専攻しているのですか？
2. 興味・関心を抱いていること の有無	・今、興味・関心を抱いている ことがありますか？	6. 興味・関心を抱いていることの有無	・今、興味・関心を抱いているこ とがありますか？
		7. 興味・関心があること	・何に興味・関心がありますか？

発話スタイルがパーソナリティ認知に及ぼす効果 (2)

準偏差を Table 5 に示した。分析の結果、「社会的望ましさ」においてのみ、発話スタイルと実験協力者の性別の交互作用効果 ($F(1,79)=2.92, p<.10$) と、発話スタイルと被験者の性別の交互作用効果 ($F(1,79)=3.50, p<.10$) が確認された。

発話スタイルと実験協力者の性別の交互作用効果から、叙述的発話を用いる女性実験協力者は、他の条件の実験協力者よりも社会的に望ましいと評価されることが示された (Table 6, Figure 1)。つまり、女性は断片的発話を用いるよりも叙述的発話を用いる方が社会的に望ましいと認知される。また、平均値の比較から、断片的発話を用いる男性は、叙述的発話を用いる男性よりも社会的に望ましいと認知されることが示された。叙述的発話は断片的発話と比較するとよりおしゃべりであるという印象を与えるため、この結果は、女性はおしゃべりな方が社会的に望ましく、男性は無口な方が望ましいという考えの現れであるとも言える。

そして、発話スタイルと被験者の性別の交互作用効果からは、男性の被験者は、断片的発話を用いる実験協力者を他の条件の実験協力者よりも社会的に望ましくないと評価することが示された (Table 7, Figure 2)。この結果は、本実験では取りあげなかった被験者の発話スタイルが無視できない要因であることを示唆している。本実験ではより自然な面接状況を作り出すため、被験者に質問カードを提示する際、「多少自分の言葉で質問しても構いません」と伝えた。しかしそのことによって、被験者の発話スタイルを統制することができず、男性被験者は自分の言葉を付け加えながら質問する人が多くなり、女性被験者は事務的に質問例を読み上げる人が多くなった。すなわち、多くの男性被験者は叙述的発話に似た質問の仕方になった。したがって、自分の発話スタイル

と類似していないスタイルで話す実験協力者に対して、社会的に望ましくないという評価を下したと解釈することができる。小川 (1998 a, 1998 b) は、二者間会話における発話のつりあいの重要性を指摘しているが、会話におけるつりあひまたはバランスは発話スタイルのような質的側面でも重要であることが予測できる。Burgoon, Stern & Dillman (1995) は、スムーズかつ快適な相互作用を促進する相互作用パターンというのが会話には存在することを指摘している。類似した発話スタイルを用いて会話をすることは、その相互作用パターンの一つである behavioral matching に当たると言えよう。このことは、自分と類似していない発話スタイルを用いる相手を社会的に望ましくないと認知したことの理由づけを支持している。しかし、本実験では実際に被験者の発話スタイルについて取りあげてはいないため、今後の課題として検討しなければならない。

ところで、本実験では、社会的望ましさの次元でのみ、交互作用の効果が確認された。この理由は、実験状況が面接場面であったことが挙げられよう。面接場面というのは、被面接者がどのような人物であるかを確かめることが目的である。その際最も重視されるのは、「責任感のある」「分別のある」「慎重な」などの項目で構成されている社会的望ましさの次元であろう。また、Stang (1973) は、小集団事態における発言量が好意や社会的な有能さの認知にどのような影響を与えるかを検討している。それによると、冗舌 (発言量の多さ) は、社会的能力の高さは示すが、必ずしも好意感情をもたらすものではないことが示された。このことも、社会的望ましさ次元において発話スタイルの影響が現れたという結果を支持している。

Table 5 実験2 条件ごとの下位尺度得点の平均値と標準偏差

実験協力者性別	男 性			女 性		
	力本性	親しみやすさ	望ましさ	力本性	親しみやすさ	望ましさ
(被験者：男性)						
下位尺度						
叙述的発話	4.84 (0.98)	5.22 (0.41)	4.92 (0.46)	5.62 (0.56)	5.70 (0.66)	5.56 (0.53)
断片的発話	5.20 (0.91)	5.29 (0.62)	4.88 (0.79)	5.46 (0.54)	5.15 (0.59)	4.94 (0.69)
(被験者：女性)						
叙述的発話	5.02 (0.80)	5.36 (0.42)	5.08 (0.29)	5.12 (0.80)	5.62 (0.39)	5.24 (0.52)
断片的発話	5.14 (0.78)	5.55 (0.48)	5.34 (0.38)	5.22 (0.84)	5.55 (0.80)	5.24 (0.57)

Note : () = SD

Table 6 発話スタイル×実験協力者の性別の社会的望ましき得点

	(実験協力者の性別)	
	男性	女性
叙事的発話	5.00 (0.38)	5.40 (0.54)
断片的発話	5.12 (0.65)	5.10 (0.63)

Note : () = SD

Table 7 発話スタイル×被験者の性別の社会的望ましき得点

	(被験者の性別)	
	男性	女性
叙事的発話	5.24 (0.59)	5.16 (0.42)
断片的発話	4.92 (0.72)	5.30 (0.47)

Note : () = SD

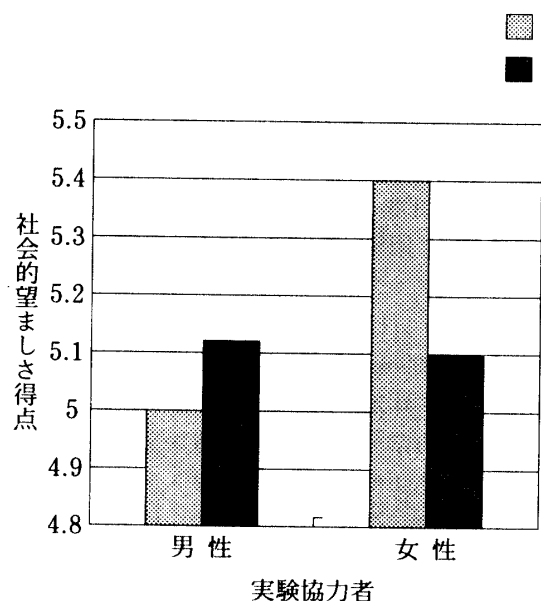


Figure 1 発話スタイル×実験協力者の性別の社会的望ましき得点

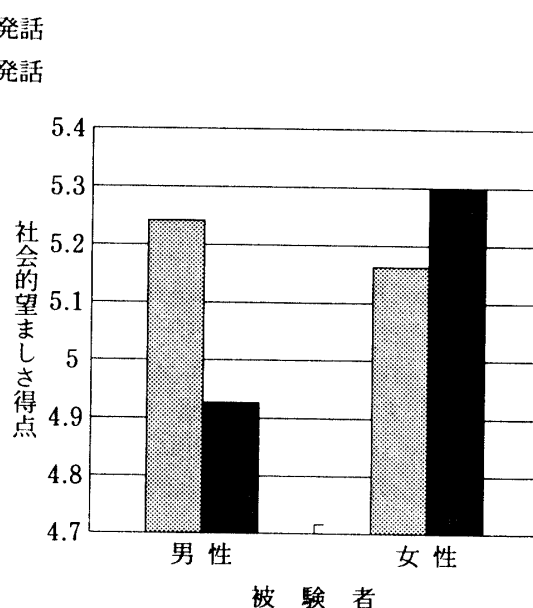


Figure 2 発話スタイル×被験者の性別の社会的望ましき得点

全体考察

本研究では、叙事的発話と断片的発話という発話スタイルがパーソナリティ認知に及ぼす影響について検討した。実験1と実験2では異なる結果が出たが、これは実験手続きの違いによるものと考えられる。実験1では「力本性」において発話スタイルの効果が見られたが、これは質問カードの影響であろう。この点などを含めた実験状況における問題点を改善して実験2を実施したため、より良い実験計画に則して行った実験2の結果を重視することが望ましいと考えられる。実験2では、発話スタイルの主効果は確認されなかったため仮説1は支持されなかった。仮説2は、社会的望ましき次元についてのみ、支持された。人は、就職面接やアルバイト採用面接などいくつかの面接を経験する。非常に限定された文脈のもとでの実験ではあったが、本研究の結果は、そのような現実の面接場面でも応用可能なことであると思われる。

また、本研究では、面接場面という多少特異な場面を

採用し、叙事的発話と断片的発話がパーソナリティ認知に及ぼす効果を検討した。しかし、面接場面以外の日常的な会話場面においても、これらの発話スタイルがもたらす影響は十分考えられる。したがって、面接場面以外の会話場面についても、さらに検討を加える必要があると考えられる。

最後に、岡本(1985)が指摘するように、発話スタイルも含めた言語的スタイルが関連する研究は、ほとんどが欧米で、そしてそのうちの大部分が、英語を母語とする被験者を対象に行われている。日本語話者を用いて追試をしたとしても、全く異なる結果が生じる可能性もある。したがって、本研究のような日本語による研究を行うことは、日本社会でのコミュニケーションの特徴を示すことにもなるであろう。また、言語は対人関係と密接な関わりを持っており、近年、社会心理学においても言語を取り上げる重要性や有効性が唱えられるようになってきた(Krauss & Chiu, 1996)。本研究は、非常に限定された側面ではあるが、言語と対人関係の関わりに関する一研究であったと考えている。今後も、このような

研究を積み重ね、より包括的かつ詳細な言語と対人関係の関わりを検討していかねばなるまい。

引用文献

- Burgoon, J.K., Stern, L.A., & Dillman, L. 1995 *Interpersonal adaptation: Dyadic interaction patterns*. Cambridge University Press.
- 大坊郁夫 1986 対人魅力印象に及ぼす身体的特徴の影響 日本社会心理学会第27回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第34回大会発表論文集, 67-68.
- 林 文俊 1978a 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 25, 233-247.
- 林 文俊 1978b 相貌と性格の仮定された関連性 (3) - 漫画の登場人物を刺激材料として - 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 25, 41-56.
- 林 文俊・大橋正夫・廣岡秀一 1983 暗黙裡の性格観に関する研究 (I) - 個別尺度法によるパーソナリティ認知次元の抽出 - 実験社会心理学研究, 23, 9-25.
- 廣兼孝信・吉田寿夫 1984 印象形成における手がかりの優位性に関する研究 実験社会心理学研究, 23, 117-124.
- 今川民雄・中村和彦 1994 印象形成における視覚の手がかりと聴覚の手がかりの優位性について 北海道教育大学紀要, 44, 57-72.
- Jones, E.E., & Davis, K.E. 1965 From acts to dispositions: The attribution process in person perception. In Berkowitz, L. (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, Vol. 2. New York: Academic Press.
- Kleinke, C.L., Staneski, R.A., & Berger, D.E. 1975 Evaluation of an interviewer as a function of interviewer gaze, reinforcement of subject gaze, and interviewer attractiveness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 115-122.
- Krauss, R.M., & Chiu, C. 1996 Language and social behavior. In Gilbert, D.T., Fiske, S.T. & Lindzey, G. (Eds.), *The Handbook of Social Psychology*. New York: McGraw-Hill.
- Lind, E.A., Erickson, B.E., Conley, J., & O'Barr, W.M. 1978 Social attributions and conversation style in trial testimony. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 1558-1567.
- Lind, E.A., & O'Barr, W.M. 1979 The social significance of speech in the courtroom. In Giles, H., & St Clair, R.N. (Eds.), *Language and Social Psychology*. Oxford: Basil Blackwell.
- Miller, G.R., & Lobe, J. 1967 Opinionated language, open- and closed- mindedness and response to persuasive communications. *Journal of Communication*, 17, 333-341.
- 中里浩明 1977 魅力形成における人格特性の次元 心理学研究, 47, 139-148.
- 小川一美 1998a 初対面時の二者間会話に対して観察者が抱く印象 - 発話のつりあいの観点から - 日本グループ・ダイナミックス学会第46回大会発表論文集, 110-111.
- 小川一美 1998b 初対面時の二者間会話において会話が抱く印象 - 発話のつりあいの観点から - 日本社会心理学会第39回大会発表論文集, 146-147.
- 小川一美・吉田俊和 1998 発話スタイルがパーソナリティ認知に及ぼす効果 - 決めつけ型発話と会話場面の観点から - 名古屋大学教育学部紀要 (心理学), 45, 9-15.
- 大橋正夫・平林 進・長戸啓子・吉田俊和・佐伯道治 1975 性格の印象評定における面接法と質問紙法 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 22, 83-102.
- 大橋正夫・三輪弘道・平林 進・長戸啓子 1973 写真による印象形成の研究 (2) - 印象評定のための尺度項目の選定 - 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 20, 93-102.
- 岡本真一郎 1985 言語的スタイルが説得に及ぼす効果 実験社会心理学研究, 25, 65-76.
- 大坪靖直・吉田寿夫 1990 印象形成における手がかりの優位性に関する研究 実験社会心理学研究, 30, 25-33.
- Pearce, W.B., & Conklin, F. 1971 Nonverbal vocalic communication and perception of a speaker. *Speech Monographs*, 38, 253-241.
- Rokeach, M. 1960 *The open and closed mind*. New York: Basic Books.
- Stang, D.J. 1973 Effect of interaction rate on ratings of leadership and liking. *Journal of Personality and Social Psychology*, 27, 405.

(平成11年9月16日 受稿)

ABSTRACT

The Effects of Conversation Styles on Personality Cognition:
An Examination of Narrative Style and Fragmented Style.

Kazumi OGAWA and Toshikazu YOSHIDA

The narrative style takes the form of voluntary and relatively lengthy statements in response to questions, whereas the fragmented style is composed of short statements in response to questions. The purpose of this study was to examine some effects of these styles on personality cognition.

In main experiment, Subjects were 80 undergraduates (half were male and half were female). Subjects played the role of an interviewer, and confederates played that of an interviewee. The subjects asked some questions according to a card provided, and the interviewee replied to the questions in the form of either a narrative style or a fragmented style. After the interview, subjects were asked to rate the interviewee's personality on a questionnaire.

The major findings were as follows: (1) subjects rated the female speaker using narrative style much more favorably on the social desirability dimension of personality than speakers in any other condition; (2) male subjects rated the interviewee using a fragmented style lower on social desirability than that using a narrative style, as well as the two female ratings.

Key words : conversation style, narrative style, fragmented style, personality cognition